

# 良い牧者であるキリスト

## ヨハネ福音書10:11-18

【新改訳 2017】

- 10:11** わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。
- 10:12** 牧者でない雇い人は、羊たちが自分のものではないので、狼が来るのを見ると、置き去りにして逃げてしまいます。それで、狼は羊たちを奪ったり散らしたりします。
- 10:13** 彼は雇い人で、羊たちのことを心にかけていないからです。
- 10:14** わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています。
- 10:15** ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです。また、わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます。
- 10:16** わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に聞き従います。そして、一つの群れ、一人の牧者となるのです。
- 10:17** わたしが再びいのちを得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛して下さいます。
- 10:18** だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。」

### 【祈りながら考えよう】

- (1) 「良い牧者」と「雇い人」の特徴をそれぞれ挙げて下さい。
- (2) 16節の「この囲いに属さないほかの羊たち」とは何を意味していますか。
- (3) 「わたしには、いのちを捨てる権威があり、再び得る権威があります」と言える人がいますか。

### 【解 説】

#### (1) 良い牧者と雇い人の特徴

「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。牧者でない雇い人は、羊たちが自分のものではないので、狼が来るのを見ると、置き去りにして逃げてしまいます。それで、狼は羊たちを奪ったり散らしたりします。彼は雇い人で、羊たちのことを心にかけていないからです。」(11-13節)

#### ①良い牧者

主は、すでにご自分を羊の門であるとしてたとえで話されたが、それに続いて、牧者であるとも言われた。ただ単に牧者であると言われただけでなく、「わたしは良い牧者です」と言われた。

この「良い」(ギリシャ語で καλός カロス) というのは「理想的な、立派な、高貴な、他に優れた」という意味である。主はこのすべての定義を満たすお方である。

それでは、良い牧者の特徴は何か。「良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます」(11節)

主イエスは、ご自身の血以外には、羊たちを地獄とサタンの手から救い出すことができないのを知って、自ら進んでご自分のいのちを彼らの罪のための供え物とされた。

ここで、良い牧者について言われていることは、キリストにだけ当てはまることである。主が良い牧者であられるのは、十字架に掛かっていのちを捨てられ、そのことによって私たちにいのちを与えてくださったところにある。

良い牧者は、羊たちを狼のような獣の危険から守るために、いのちがけで働く。また、養うために、牧草地へ導いて行ったり、いこいの水のほとりへ連れて行く。

#### ②雇い人

「雇い人」とは、金のために働く人のことである。「雇い人」は「羊の所有者」ではない。危険が迫ると、羊を置き去りにして逃げ去り、狼のなすがままにする。

雇い人は賃金が目的で仕えた。羊の益よりも自分の幸福を求めている。雇い人は、羊よりも自分の方が大切なので、危険に直面すると、逃げ出してしまふ。これは、今日の雇われ牧師、サラリーマン牧師にも当てはまるかもしれない。

#### (2) 良い牧者と羊たちの関係

「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っており、わたしのものは、わたしを知っています。

ちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じです。また、わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます。」(14-15節)

このことばは、キリストとすべて彼を信じる者たちとの間にある、親しい緊密な交わりを表している。

主は、ご自分のすべての者を特別な愛と顧みによって知っておられる。この聖句の中の「知る」の原語は「γινώσκω ギノースコウ」で、「仲間として良く知り合っている」ということを意味する。主イエスと私たちは、良く知り合っている仲なのである。御父と御子が、全き愛をもって愛の交わりを持っておられるのと同じ親密さをもって、主イエスが私たちを愛しておられ、私たちのことを知り尽くしておられると語っている。これは、実に驚くべきことである。

私たちのすべてを知っておられる。私たちの名前も、生い立ちも、環境も、性格も、弱さ、試み、誘惑など、心の中もすべてである。また日ごとにひとりびとりの必要としているものを正確に知っておられる。

一方、私たちは信仰と確信をもって主イエスを知っており、未信者には想像もできないような愛に基づいた信頼を彼に置いている。キリストを救い主として、また友としてを知っており、またそこに安んじている。ユダヤ人たちは、羊の群れが、いかに牧者を信頼しているかについてよく知っていた。

#### (3) 一つの群れ、一人の牧者となる

「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊たちがいます。それらも、わたしは導かなければなりません。その羊たちはわたしの声に聞き従います。そして、一つの群れ、一人の牧者となるのです。」(16節)

「この囲いに属さないほかの羊たち」とは、異邦人のキリスト者のことである。異邦人という羊はユダヤ人の「囲い」には入っていなかった。主がこの世に来られたのは、特にイスラエルの羊にかかわってのことであったが、主は異邦人の救いもみこころに留めておられた。主は、選民であるユダヤ人だけを救うためにこの世に来られたのではない。異邦人をも救うために来られた。そして、その人々を一つの群れとするためである。パウロは次のように記している。

「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」(エペソ2:14-16)。

律法自体は聖なるものであり、正しく、また良いものであったが(ロマ7:12)、人間の罪の性質によって、他人を憎む理由として用いられた。律法によって実際にイスラエルは神の選民とされたため、多くのユダヤ人が傲慢になり、異邦人を軽蔑した。異邦人は、敵意のある態度を取って、それに応じた。それが、「反ユダヤ主義」として、よく知られている。しかし、キリストはどのようにして、「敵意」の原因である律法を取り除かれたのか。

主は、私たち人間が破った律法の刑罰を受けるために十字架で死んでくださった。このようにして主は、神の義の要求を完全に満たしてくださった。もはや律法は、「キリストにある」者に対して何も言えなくなった。キリスト者は(律法ではなく)恵みの下にいる。

律法によってかき立てられた敵意が廃棄された結果、主は新しい一人の人を造り上げることができた。キリストのからだである教会(普遍的教会)として、一つの群れを形造られた。今日、私たちは民族を越え、社会的階層の相違を越え、性別を越えて、キリストにあって一つとされていることは、何と大きな特権だろうか。

#### (4) いのちを捨てる権威があり、再び得る権威がある

「わたしが再びいのちを得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛して下さいます。

だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。わたしはこの命令を、わたしの父から受けたのです。」(17-18節)

主はご自身の権威によって「いのちを捨てる」こと、また「いのちを再び得る」ことを話された。このように言えるのは、ご自分が神であられるからにほかならない。

だれも、主のいのちを主から奪える者はいなかった。主は神であられたので、ご自身の被造物がたくらむどんな殺害の陰謀も及ばなかった。しかし、主イエスは人間に殺されたのではなかったか。確かにそうである。

使徒2章23節では「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました」、

また1テサロニケ2章15節では「ユダヤ人は、主であられるイエスをも、預言者たちをも殺し、また私たちをも追い出し、神に喜ばれず、すべての人の敵となっています」と、書かれている。

主イエスはそうされるのをあえて許されたのである。主が「頭を垂れて霊をお渡しになった」(ヨハネ19:30)とあるように、それは主ご自身の力と意志によるものであった。

「わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです」と主は言われた。主がいのちを捨て、死者の中からよみがえることが、御父の任命であり指示であった。

